

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 Activation of Color Information in Second Language Comprehension
 (第二言語理解における色情報の活性化)
氏 名 寺井 雅人

論 文 内 容 の 要 旨

第二言語語彙研究では、単語理解メカニズムの解明に向けた研究が行われている。先行研究では様々なモデルが提唱され、それらの妥当性の検証が行われてきた。これらのモデルの中には、第二言語の単語における第一言語の役割を仮定するものがある。例えば、習熟度が低い学習者は、第一言語を通し単語の意味を理解するが、習熟度が高くなるにつれその依存度が低下すると仮定されている。しかし、これらのモデルは綴り字や音の処理といった言語的処理が完了した後に表象される概念についての仮定や、習熟度が上がることで概念表象にどのような変化が起こるのかについて説明が不十分である。認知心理学における身体化認知研究では、言語理解における概念処理が検討されている。これらの研究では、言語理解メカニズムとして言語的処理だけでなく単語が示す物体の視覚的特徴などの非言語的情報の活用も仮定されている。しかし、第一言語における研究結果は蓄積しているが、第二言語の言語理解においても非言語的情報が活用されるのか未だ統一した見解はない。そこで本研究では、視覚的特徴の一つである色に焦点を当て、第二言語の単語理解においても非言語的情報が活用されるのか、そしてそれに第二言語習熟度が関係するのか検証した。

英語母語話者 35 名, 日本語母語話者 72 名を対象に意味ストループ課題を実施した。日本語母語話者のうち, 36 名は日本語, 残りの 36 名は英語で課題を行った。この課題では, まず文が提示され (e.g., *Joe was excited to see a bear in the woods*), その直後に, 文に含まれていた名詞 (*bear*) が, 1) その名詞が示す対象の典型的な色 (茶), 2) 非典型的な色 (白: ホッキョクグマ), 3) ありえない色 (緑) のいずれかの色で塗られ提示された。参加者は, その単語が何色で塗られているか素早く答えた。実験項目はすべて具象名詞で, それぞれ 2 つの文の典型性 (文が暗示する名詞の色が典型的か非典型的か) が設定された。実験項目の色の典型性は, 本研究に参加していない 26 名の日本語母語話者を対象に行った予備調査の結果をもとに決定した。さらに, 本研究の参加者が, 予備調査に基づき実験者が想定した色の典型性を持っていたかを確認するため, 意味ストループ課題実施後に典型性に関する評価課題を実施した。参加者の英語習熟度は, 既存の英語語彙サイズテストで測定した (Meara & Miralpeix, 2016)。

分析の結果, 第一言語では色情報を活用しながら言語理解を行うことが確認され, 先行研究の結果が支持された。具体的に, 英語母語話者及び日本語母語話者が第一言語で意味ストループ課題を行う場合, 典型的な色で塗られた名詞への反応速度は, 直前に読んだ文の典型性に関係なく, 非典型的及びあり得ない色で塗られた名詞に比べ有意に速かった。第二言語で実施した課題においても類似した結果が得られた。英語習熟度が高くなるにつれ, 典型的な色で塗られた名詞の反応速度はあり得ない色で塗られた名詞に比べ速くなることが明らかとなった。また, 名詞が示す対象の典型的な単語の色が赤色の場合, 習熟度の高低に関係なく, あり得ない色で塗られた単語よりも有意に反応速度が速いことが示された。以上の結果は, 第二言語の習熟度が高くなるにつれ, 第一言語と同様に第二言語の言語理解においても非言語的情報が活用できるようになることを示唆している。また, 第二言語の単語知識の発達段階は名詞が示す色とその典型性の関係によって異なる可能性も示された。本研究の結果は, 既存の第二言語語彙モデルに対し, 言語理解及びその発達には非言語的情報が影響すること, そして習熟度の向上が理解する産物に違いをもたらすという新たな知見を提供する。